

平成26年度国立天文台研究集会開催報告書

平成25年6月19日

国立天文台長 殿

代表者	氏 名	たなか まさゆき		
		田中 賢幸 		
	所属・職	国立天文台ハワイ観測所・特任助教		
	電話	内線3285	E-mail	masayuki.tanaka@nao.ac.jp
研究集会名	第一回銀河進化研究会			
開催期間	2014年 6月 4日 ～ 2014年 6月 6日			
開催場所	国立天文台大セミナー室			
参加人数	82名(ただし、名簿に名前を書かなかった参加者もいたようである)			
研究集会の概要	本研究会は今まで銀河コミュニティになかった、銀河サイエンスを幅広くカバーし議論に重みをおいた、初めての定期的な研究集会である。 銀河進化をテーマとした大きい研究会は数年に一度のペースで開催されてきたが、日進月歩を続ける銀河研究において、時流に乗ったサイエンスをカバーするにはそれではあまりに不十分であった。定期的な研究会もわずかながらあるのだが、それらは分野を限定したもので、様々な側面を持つ複雑系である銀河を研究するためには必ずしも最適なものではなかった。そこで、今までの研究会とは相補的に、より一般的かつ定期的に研究結果を発表する場を提供するため、第一回銀河進化研究会を行った。 この研究会は研究発表以外にも、銀河コミュニティの将来を議論するという目的もある。これは定期的な研究会ならでのことであろう。現在、観測天文学はサーベイモードへ大きく舵を切っているところである。近い将来、銀河サイエンスを小さな研究室単位というよりも、コミュニティという単位で戦略的に展開する必要に迫られるであろう。日本の置かれている立場を確認し、今後の方向性を議論するという意図もこの研究会では大きい。 それと関連して、現在、光赤天連をあげて2020年代のサイエンスを検討する活動が進んでいる。本研究会はその活動の一環でもあり、2020年代に大きく発展しそうなサイエンスを各自に考えてもらい、研究会を通して議論する場を提供する。これは、サイエンス検討班メンバーだけが検討することよりも、はるかに意義のあることで、各自が各自の将来サイエンスを考えることで、目先の結果にとらわれない、長期的なサイエンスを展開できる効果が期待される。			

研究集会の成果

本研究会を端的に述べると、大成功であった。まず、講演申し込みの数がこちらの想定を越え、研究会の日程を急遽半日長くすることになった。さらに、当日は実に82名(これは、受付の名簿に名前を書いた人の数で、世話人の知る限り、名前を書かずに参加していた人も多く、実質90名を越えていたのではないかと思われる)が参加し、議論も大いに盛り上がり、予定した講演時間を過ぎてしまうことがしばしばあった。今までの研究会とは一線を画した、画期的な研究会であったと思う。

まず、大きな目的の一つであった、各自が思う存分に発表する、という目的は達せたと思う。発表するのみでなく、質問・議論を通して、研究をより発展させることも重要で、本研究会では通常の研究会よりも質問時間を多くとった(例えば、多くの講演では発表が15分、質問が10分とした)。また、議論をしやすくするための工夫もした。具体的には、大セミナー室で使用するスクリーンは中央の一つのみとし、そしてそれに向かうように机を配置した。さらに、後ろには机を置かず、全体的にコンパクトな作りにした。テレビ会議接続はせず、講演の途中でも遠慮なく質問OKとし、また発言の際にはマイクを使わずにその場でしゃべるようにした。手を上げる必要もない。こうした工夫の結果、質問時間をしばしば超えて議論が盛り上がることもあり、大きな手応えを感じた。また、それぞれの講演者に2020年代に大きく発展しそうなサイエンスに触れてもらい、各自が将来何をすべきか、ということをし少しでも考える機会を与えることができたことも、大きな成果と言えよう。

ポスターセッションも工夫した。ポスターセッションを初日の夕方に行い、ごく簡単なお酒とおつまみを用意し、各自がリラックスした状態で議論をできるようにした。我々世話人が驚愕したことであるが、こうして行ったポスターセッションでは、ポスターを見ずに雑談に興じる人はほとんどいなく、ほぼ全員がポスターの前で議論をしているのである。今まで多くの研究会で、ポスターセッションはあってないようなもの、という印象を受けてきたが、やり方次第でここまで違うものかと驚いた。

研究発表自体は特に分野を限定せずに募集をしたが、ひとつだけ2020年代の衛星ミッションに関する“Focused Session”を用意した。そのセッションでのみ招待講演をお願いし、日本がリードする、または日本が深く関わる余地のある衛星ミッションの概要と現状、そして日本の置かれた立場をレビューしてもらった。こうした衛星ミッションを初めて知ったという参加者が多かつたらしく、議論というよりは現状を周知した、という意味合いのほうが深かったかもしれないが、今後も継続して議論することとし、次回以降で銀河コミュニティーとしてサポートするミッションの選定など、より突っ込んだ議論をする土台を作ることができたと思っている。

本研究会は継続的な研究会であるため、毎回必ず反省点を洗い出し、次回をよりよいものできるように最後に議論を行った。まずは、第二回を開催することを確認し、さらにその日程についても、毎年6月の第1週の水・木・金とした。好評であった、研究会のスタイル(机の並びなど)やポスターセッションは今後も続けることにする。その他、いろいろ反省点・コメントが出たのだが、何よりも印象的だったのは、講演の最中に多くの議論をしたにも関わらず、もっと議論の時間が欲しかったという声が多く聞かれたことであった。これは、議論主体という本研究会の思想を強くサポートするもので、そして今後も研究会を継続して続けていくための強力なモーメンタムになったと思っている。

	総括として、第一回銀河進化研究会の当初の目的は達成できたのではないと思う。 銀河コミュニティーの集まる定例研究会という認識は、少なくとも今回の参加者の間では広まったと思われるし、今後も定期的に続けていくことで、さらに多くの人が参加することを期待している。 「次回はうちでやってもいい」と、研究会ホストを申し出てくれるような研究機関もあり、大変心強く感じた。
その他参考 となる事項 (希望事項も 含む)	研究会ホームページ： http://optik2.mtk.nao.ac.jp/~kiyoyabe/gev2014/ 財源についてであるが、世話人数名で科研費を取得することで、第2回以降の旅費を確保していきたいと考えている。 しかし、来年からすぐに十分な科研費が取れるかは不透明であるし、今後参加者が増えると足らなくなる可能性もある。 天文台研究交流委員会には来年以降も旅費の補助を是非ともお願いしたい。